

上郡町の偉人

大鳥圭介

第二十七回「鵬程万里」中川由香

浅田麟之輔(惟季)は戊辰戦争で圭介を支えた伝習隊の二番小隊長です。浅田は二八六〇年、遣米使節監察小栗忠順の従者として福島義言という変名で渡米、世界一周し「花旗航海日誌」を著しました。率直で観察眼鋭く、当時の男女の様相、労働、商売の方法等日米の違いを著し、ミシンやガス灯等の新規の用具を紹介しました。妻は、漢方医で浅田館のルーツとなった浅田宗伯の娘です。圭介配下の伝習隊には、様々な分野で明治の世に貢献した人物がいます。浅田はその一人です。

筆まめな浅田は戊辰戦争記録「北戦日誌」を記しました。丁寧な推敲と改訂を重ね、改訂版があります。旧幕側の野州・会津戦争の詳細な実録は希少で、圭介の「南柯紀行」と共に、史料価値の高い記録です。一部は明治政府による戊辰戦争編年記録「復古記」に収録されました。地形の是非や武器の用法を分析し聡明に論じる一方で、喜怒哀楽や情感の豊かさも伝わる名文です。

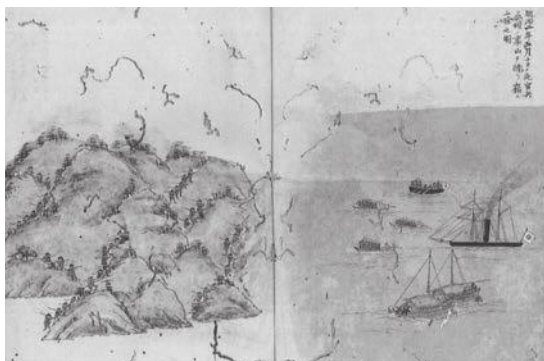
浅田の戦隊行動は勇敢で、我が身を顧みず前線に立ち、負傷も多く受けました。宇都宮戦争の前哨戦、幕田の戦いで、豪雨の中浅田は銃弾で右手と股を負傷。しかし翌日の宇都宮城攻防戦で、圭介の本営の苦戦に無理をおして戦いに出ました。傷が開き激痛で歩けなくなり、駕籠で運び出されます。そして敗軍から、隊長を含め多数の脱走が生じます。脱走者は頼むに足らない脆弱な鼠だと浅田は怒りつつ説得に回り、脱走を食い止めた。その後峻嶮な六方沢を、圭介と共に徒歩で越え、傷の痛みと餓えを耐えました。多くの士官が負傷で離脱する中、田島、藤原などで浅田は圭介を補佐し続けます。藤原の僻地で二カ月程帯陣した際は、食糧は味噌豆野菜しかなく、爬虫類で飢えを凌ぎました。その藤原での新政府軍との戦いで、浅田は罌に迫る敵に一気に発砲し撃退。白兵戦を行い、兵器輜重を敵から得ます。勝利の後、捧げ筒で圭介を迎え戦勝を祝いました。会津の山入村の戦では、左肘を弾丸

が穿つ重傷を負います。包囲され絶望的な状況で自害しようとしたが、三人の兵が身を以て進んで犠牲になり浅田を脱出させ、九死に一生を得ました。母成峠の敗戦で伝習隊は離散します。檜原の山中で浅田は、死んだと聞いていた圭介らと再会。手を取り合い泣いて互いの存命を喜びました。その後、仙台で幕府陸軍と榎本武揚の海軍が合流。一同は、函館に徳川家の新天地を求める事に決めます。負傷者は原則仙台に残されますが、浅田は重傷でありながら箱館まで圭介に同行。病院に入院しながら様々な記録を作成します。海戦・陸戦の様相を「函湊戦図」に鮮やかに描きました。

このように浅田は、圭介と艱難を共にしました。宇都宮からの撤退の際は「状況を知らない者は、宇都宮は上州・下州・奥羽の喉で要所なので撤退は拙策と誹謗するだろう。しかし奥羽同盟は未だ成らず、会津は兵を出さず、弾薬糧食欠乏の中、退路を断たれ全滅する恐れもあった。機を見て速やかに軍を引いたのは大鳥氏の正に神策だ」とします。宇都宮の後、幕府との繋がりを絶たれ、伝習隊は会津の傭兵となります。圭介は、今市の敗北では雇われ客将として、苦しく複雑な立場でした。「大鳥氏は

別の考えがあつても会津の意見に従わざるを得なかった。軍費や糧食を会津から補給されていたからだ。これは脱走軍の真に嘆息する所だ。後世はみだりに拙策と評するべきではない」と後世の研究者に示唆しています。戦勝で称える一方、敗戦でも浅田は圭介を弁護しています。

戦後、浅田は乙葉林八と改名し、牛込区横寺町で浅田漢方の躰壽堂を開きます。腹痛を治す澄涼丸、伝染病を予防する防臭散などで知られました。また長男の乙葉辰三は警視庁技官で、薬学と鑑識の権威となりました。浅田は大正七年、大連で没しました。戊辰戦争では死を恐れず勇猛果敢に戦った武人の浅田は、明治の世に薬術で人々を癒しました。



浅田麟之輔 作「函湊戦図」

まじの話題

今月のトピックス

暮らしの案内

お知らせ

イベント

スポーツ

鵬程万里

情報ステーション

当番医・新着図書番組表

相談